

# 床運動音楽のアナリーゼと奏法

——メキシコ・オリンピック規定問題——

菊 本 哲 也

## はじめに

1968 年 10 月メキシコシティで開催される第 19 回オリンピック大会の体操部門女子床の規定問題音楽は、日本では 1967 年春と夏の二回、やや異なった楽譜が発表された。この二種の楽譜は作曲の経過を示しており、また、動きの変化や技の熟達の経過をも示したものと考えられる個所がみられる。たまたまこの二種の音楽を各半年ずつ演奏して来て、それらの問題点に気づき、両者を比較することにより、動きの伴奏音楽の在り方や奏法の一面を解明できるのではないかと考え、ここに比較考察を進めることにした。

「メキシコオリンピック規定問題音楽」を、これ以後「メキシコ規定」と略すことにする。その他の規定問題音楽についても同様に略し、いずれも「動き」ではなく「音楽」を示すこととする。

## 資料楽譜について

メキシコ規定の二種の音楽を次のように略称で示すことにする。

最初の音楽……unfinished work……UW

決定版音楽……finished work……FW

なお FW の○印付数字は、日本体操協会発行の動きの図解と合致する。他の数字は小節数を示す。

## 考 察 I

ここでは FW のアナリーゼに、合わせてローマ大会以後の規定問題音楽との比較考察を進める。(メルボルン大会より伴奏音楽が付いているが、資料不足のためローマ大会以後とした)

### 1. 所 見

曲は Italian canzone<sup>1)</sup> を想わせる優美な melody と単純な harmony とで構成された Thema<sup>2)</sup> を有し、これを主として arpeggio<sup>3)</sup> といくつかの grace-note<sup>4)</sup> とで飾っている。殊に arpeggio は、ともすれば、かたい chord<sup>5)</sup> の連打になりがちな伴奏音楽を fantastic な音楽にしていることは、伴奏者の立場からも喜ばしいことであり、ローマ規

---

1) ここでは本来の canzone ではなく軽音楽の canzone を指す。

2) 主題。普通独語を用いることが多い。

3) 分散和音。伊語。

4) 装飾音。

5) 和音。

定の romantic な音楽と並んで、伴奏音楽の目的<sup>6)</sup>からもうなづける優れた作品と言える。

メルボルン以来、規定問題音楽はいかに chord の羅列と言った作品が多く、また、オリンピックと世界選手権<sup>7)</sup>とでは、より世界選手権の方が荒い作品である。

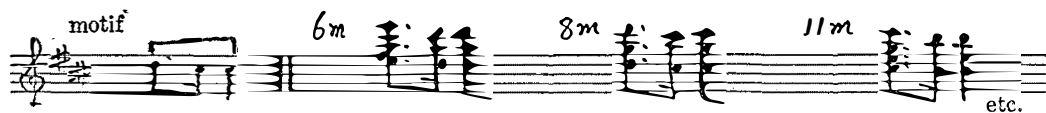
## 2. 音楽形式

特に定まった形式はとらず自由に Thema の展開を行なっている。その意味では、多声的<sup>8)</sup>ではないが invention<sup>9)</sup>とも言えるし、また、まとまった melody はないが一種の paraphrase<sup>10)</sup>とも言えよう。美しい melody からは romance<sup>11)</sup>を想わせるものもある。やや拍子の変化がはげしいが、これは「動き」によるものである。トウキョウ規定の二部分形式、ローマ規定の流れといったものはないが、motif<sup>12)</sup>操作の巧みさは、拍子の変化による乱れを十分捕っていると思われる。考察Ⅱに述べるが UW と FW を比較するとき、動きに合わせるために大変苦しんだ跡がみられ、そこに音楽的構成の統一を欠いたこともやむを得ないようである。

## 3. 主 題

いかにもイタリア風な Thema が数回にわたって現われ、特にとりあげるような別の Thema<sup>13)</sup>はない。一般にこの程度の小品では、複数の Thema を持つことはかえって音楽をアンバランスなものとする事が多く、単一主題による作品としたことは、むしろ良い結果をもたらしている。また motif の巧みな展開は、一層全体をひきしまったものとしている。

motif は譜例のように 3 ケの音から成り、主として短 2 度の順次進行と同度進行とで構成されており、リズムは附点 8 分音符、16 分音符及び今一つの音符とで構成されている。



## 4. 序 奏

動きの伴奏音楽には、多くの場合序奏 (introduction) を必要とする。にもかかわらず、ドルトムント規定<sup>14)</sup>までは序奏がなく、演技の開始に合わせて演奏しなければならなかった。したがって、演技開始時における音楽の「動きを誘発する役割」は無視されていたことになる。

これは伴奏音楽の重要な一要素を欠くことであり、伴奏者の立場からも、不要な精神的緊張を強いられるものである。従来「動きに合った音楽であるから、動く前の音は不要で

6) 動きの誘発。

7) 世界体操選手権大会。オリンピック大会と 2 年ずれて 4 年毎に開かれる。規定問題は兩大会をくぐりに 2 年毎に作られている。

8) 対位法によって書かれた音楽。Polyphony。

9) 即興曲または創意曲。多声的な手法によって書かれる。J. S. Bach の invention。

10) ある楽曲を非常に装飾的に他の楽器のために書きかえた曲。

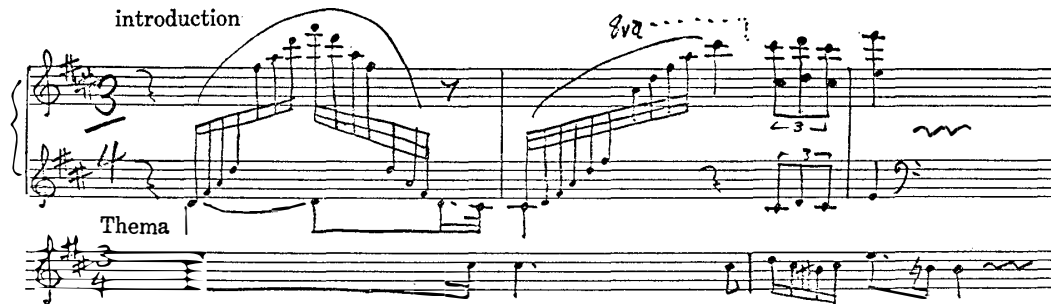
11) 美しい melody を主体としたゆるやかな愛の歌。

12) 動機。音楽構造における最小の独立単位。

13) 副主題を持つのが普通であるが、この音楽にはそれらしきものがみあたらない。

14) 1966 年世界体操選手権大会。

あり、規定に含まれない部分として、むしろ有ってはならない……」といった考え方であつたらしい。しかしメキシコ規定には2小節余りの序奏が付いており、しかも巧みな作曲法により、**Thema**の一部として組み込まれているのである。このことは特筆すべきことであろう。



## 5. その他

これまでになく高度な演奏技巧を要求していることもみのがせない。この点でも、ローマ規定と並ぶピアニスティックな作品である。

ローマ規定の繊細さと異なり、メキシコ規定は荒々しい **broken chord** が多いが、少なくとも他の規定とは違って弾きごたえのある作品である。たとえてみれば、ローマ規定のショパン風、メキシコ規定のリスト風とも言えるかもしれない。

以上、これまでの規定問題音楽と比較しながら全体的考察を進めたが、総じて、ピアノを用いた伴奏音楽としては、ローマ規定と共に優れた作品と言える。

## 考 察 II

UW と FW の比較と奏法を中心に考察を進めることにする。

UW と FW の総体的比較によると、UW は動きの熟達しないうちに作曲したものではないと思われる。理由は、FW の方が全体に UW より速くなっていることと、部分的には UW の方が動きに合ったりリズムを持つが、統一を欠いていることである。またアクセントの移動や、リズムの変化からも推察できる。

FW は音楽的にまとめようとしているため、UW からかなり変化した部分があり、必ずしも伴奏音楽として FW の方が良いとは言えない。むしろ UW の方が動きに合っている場合も多いのである。そこで各技に忠実に作曲した UW と、それを音楽的に整理した FW とを順次比較していくことにする。

なお小節 (measure) を m で、拍 (beat) を b で示すことにする。例、2m 3b……2小節目の第3拍。

### 1. 1m から 4m 1b まで

序奏の2小節はどちらもほぼ同じ結果となり、かすかに最初の D 音は UW のような **tenuto** の方が自然であり、主題開始音としての D 音をひきたてることができる。なお UW の3小節の序奏を、FW では2小節にまとめているがその方が効果的である。しかし演技開始の 4m 2b より助走に入る 5m 2b までは、UW の方が動きに合っている。いず

れ動きに合わせた演奏をしなければならず、メトロノーム記号<sup>15)</sup>はあまり意義がないが、FW の ♩=100 は速すぎるし、技の構成から考えても rit<sup>16)</sup> のある方が妥当である。しかも FW の ① はともかく、③ は UW のように arpeggio の方が効果的である。① も速く奏すれば arpeggio で良く、したがってこの部分は UW の方がより良いと思われる。なお、この部分には当然 cresc<sup>17)</sup> を必要とする。

## 2. ⑤ ⑥ の右手の部分

UW ⑤……和声学的にバス音の重複を去けている。

⑥……いかにも即興的にオクターブのままである。

7m 1b のジャンプの後、2b ではかなりホップすることを意図して tenuto が付いている。

FW ⑤……バス音との重複はかまわず、弾きやすく美しい chord に改めた。

⑥……6度音を加えて chord の密度を増している。

7m 1b のジャンプの後のホップを 2.5b の位置に変えた。

## 3. ⑦ ⑧ ⑨

UW にはこの部分が欠けている。このため 1967 年前半期の伴奏の際苦労したものである。やむなく 8m を遅く弾いたりした。

## 4. ⑩

UW……ワルツ<sup>18)</sup>ではなく、ジャンプの Cis 音及び D 音（2 回目ジャンプ）のみ強調している。

FW……UW の 3 連音符をワルツにふさわしく改めている。



奏法例<sup>19)</sup>のように演奏すれば、演技者にはわかりやすい。すなわちステップを合わせやすいのである。しかしワルツの性質を無視したものであり、また、2小節ずつに切れやすいことにもなるので、FW のように奏する方が良いと思われる。たとえば次の譜例のようにアクセントを付けても良い。

15) ドイツのヨハン、メルツェルが 1815 年に発明した拍節機を用い、1 分間の拍数を示す記号。  
例 M. M.=80。

16) ritardando 伊語。だんだんゆっくり。

17) crescendo 伊語。次第に強く。

18) 規定演技解説書によれば、駢歩 3 歩を「ワルツの節度で」とある。

19) 1967 年全日本体操選手権大会（名古屋市）で、いくつかのチームがこのように演奏していた。





なお、ジャンプの音の *arpeggio* は不要である。アクセントのみで良いと思われる。

5. ⑬

UW には *decrescendo* のみで *arpeggio* 記号はないが、FW のように *arpeggio* が良い。それも遅く、たっぷりに左手から右手へ順次奏し、最後の A 音で動きも終るよう合わせるのが良い。なお 14m 1b は FW のように附点音符とし、いくらかアクセントを付けて、アラビア車輪の力点<sup>20)</sup>に合わせると良い。

6. ⑭ ⑮ ⑯

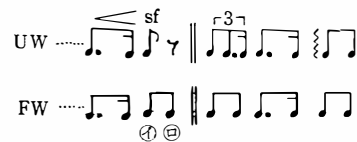
ここで優美な主題が現われるのであるが、この部分より少し後までの左手の *broken chord* は、UW と FW とでは少々異なっている。UW では作曲者の習慣らしく、音も多く、第1指から第5指へ同度音を二度弾く形がみられる。FW ではほとんどこの形を省き、音もやや少なくなっている。これは *broken chord* の一般的な整理とみてよい。同時に、動きの速いこの部分の演奏を容易にしている。

7. ⑰ ⑱

⑰ のターン<sup>21)</sup>はどうしても遅くなり、このため実際には UW のようなリズムとなる。したがって UW の方が良いことになる。



8. ⑳ ㉑



現在少なくとも日本では、㊥ の音で足をふり上げて次の側転（車輪）へ移るようである。しかし、図解によれば ㊦ の位置でふり上げ、㊥ ではすでに側転へ移っていなければならない。UW では ㊦ に *sfz*<sup>22)</sup> が付いており、㊦ で足をふり上げることを意図したものと思われる。なお、㊥ でふり上げている現在、次の倒立へ至る間をひどく遅く演奏しなければならない、このことから、㊦ でふり上げの方が正しいのではないと思われる。また倒立の後、UW のように *arpeggio* で奏する方が起き上がる動きに合って効果的である。

9. ㉒

UW のようにやや強いアクセントを持った *arpeggio* が効果的である。

10. ㉓ ㉔ ㉕

UW では ㉗ ㉘ ㉙ と同様に欠けていた。

ここでは、左手の Tema を右手の *broken chord* で飾ったものであり、後半 ㉕ になつて両手によるオクターブの Thema になっている。

20) 一般に足先の離床するとき最もアクセントを必要とするはずである。

21) 規定演技解説書によれば、“ひねり”となっている。

22) *sforzando* 伊語。その音を特に強める。

FW では、総じて曲中の標語は省略されているが、UW の標語をほぼそのままあてはめて良く、ここでも *piu vivo*<sup>23)</sup> ♩=120 をあてはめることができる。ただ UW には拍子の変化はなく、FW では  $\frac{6}{8}$  拍子となっていることから、おそらく UW の段階ではまだ作曲者自身、まとまった譜面とは考えてなかったものと思われる。次の ②⑥ にしても、UW は *atempo*<sup>24)</sup> ♩=80 としており、この間、拍子はずらず、速さのみ変化していたようである。

11. ②⑥ ②⑦

UW 右手……各音が chord となっている。

左手……右手と同じリズムで根音を奏する。

FW 右手……強拍のみ chord である。

左手……拍子どおりの伴奏形である。

これは UW が作曲者の習慣によるものであり、FW は整理されたものであろう。

②⑥ の前方回転のアクセントは FW の 4b であり、②⑦ の 1b に合わせやすいので注意を要する。

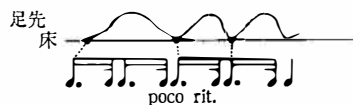
12. ②⑧ ②⑨



この違いは大差ないとしても、FW の方が左手 1b のアクセントをやや強調し、*tenuto* に奏することとなり、FW の方が良い。

13. ①⑩ ②⑩ ③⑩

この □ の記号は図解にもないのであるが、3回のホップを示すことには間違いない。3回のホップに対し、音楽には4つのアクセントがあるわけであるが、UW の *poco rit.*<sup>25)</sup> を考え合わせると、1回目のホップは音楽の方が動きに先んじて演奏し、重心を引き上げるのを助け、音楽の2アクセント分をこれにあてる。2回目、3回目は各半拍ずつに合わせ、かわりに *poco rit.* を生かすと、うまく合致することになる。



ここでも動きの開始部分における「音楽による動きの誘発」が活用されるのである。

14. ③③ ③④

③④ の部分も UW には欠けていた。UW の *piu lento* はここでも生かされる。

15. ③④ より ③⑤ の前まで

UW では2小節である。しかし *accele. molto*<sup>26)</sup> ♩=152 が示されている。

23) 一層生々と。

24) もとの速さで。

25) 少しずつおそく。

26) しだいに速く、より一層！。

FW では1小節にまとめられている。

結果は同じかもしれないが、この部分の動きの速いことを考えるとき、FWの方がよりふさわしい記譜である。

また FW は全体に1オクターブ低くなっており、より迫力を感じさせている。

15. ㊸

次の譜例のようなリズムとなるはずであるから FW の方が良い。



16. ㊹

3拍は不要であり、UW の半拍で良いと思われる。

### おわりに

以上のように、全体的所見と UW, FW の部分的比較及び奏法の考察を試みた。

これは規定問題であり、そのため動きによく合った音楽が作曲されているので、このように細かい分析ができたのである。自由問題や、またダンス等では、これほど綿密に動きのリズムを取り入れて作曲する必要はないが、一応基本的伴奏法、作曲法として学ばねばならないのではないと思われるし、部分的あるいは本質的に活用されなければならないと確信している。演技者、伴奏者共に、動きと音楽との相対的な関連性を十分学んでこそ、より優れた伴奏音楽が生れるものと考えている。

自己の体験をととしての些やかな研究ではあるが、ここに発表させていただくことにする。

### 参 考 資 料

『メキシコオリンピック規定解説書』（日本体操協会）。

『音楽辞典』（音楽楽友社）。

『作曲法教程』 長谷川良夫著（音楽楽友社）。

## UNFINISHED WORK

Handwritten musical score for "UNFINISHED WORK" by Tetsuya Kikuno. The score is written on five systems of grand staves (treble and bass clef). It includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings. Handwritten annotations in Italian and tempo markings are present throughout the piece.

Tempo markings and annotations include:

- $\text{♩} = 108$
- $\text{rit.} \dots \text{♩} = 80$
- $\text{piu vivo } \text{♩} = 120$
- $\text{p. subito}$
- $\text{a tempo } \text{♩} = 80$
- $\text{poco rit.}$
- $\text{piu lento}$
- $\text{decresc.}$
- $\text{molto}$
- $\text{p. subito}$
- $\text{molto } \text{♩} = 152$
- $\text{a tempo } \text{♩} = 80$

FINISHED WORK

Handwritten musical score for a piece titled "FINISHED WORK". The score is written on ten staves, with the first six staves containing musical notation and the last four staves being empty. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and dynamic markings. The tempo is marked as  $\text{♩} = 12$  at the beginning and  $\text{♩} = 100$  later in the piece. The key signature is one sharp (F#). The score is numbered with circled numbers 1 through 32, indicating measures. There are also circled numbers 1 through 6 at the top of the first staff. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and dynamic markings like  $p$ ,  $f$ ,  $pp$ , and  $ppp$ . The score is written in a cursive, handwritten style.

## 1960 年 ローマオリンピック規定問題音楽



## 1962 年 プラッグ世界選手権規定問題音楽



## 1964 年 トウキョウオリンピック規定問題音楽



## 1966 年 ドルトムント世界選手権規定問題音楽

